第二号

千八百七十七年二月廿四日版行

東京「タイムス」新聞抄譯

五〇 日本ト朝鮮ノ関係

六〇 朝鮮國ノ政府ト改革

4020

414
A 718

大正十一年四月
大臣官房秘書課

日本ト朝鮮ノ関係

第一　交際

一昨年ヨリ今ニ至ルマデニ年ノ間九ツ外国ノ識者ハ深切ニ意ヲ西亜ノ極東ニ住スル日本ト朝鮮トノ関係如何ニ注ガサルモノナシ蓋シ此ノ両国ハ地理ニ於テコソ隣国タシ其事物トオカトハ頗ル相ヒ異ナル所アリテ其差別ノ甚シキハ亜西亜洲中ニ殆ント其比ヲ見ズ然リ而シテ日本帝国ガ近年突陸ニ於テ著シキ進歩ヲ改メタルガ為メニ此ノ両国ノ関係ニ於テモ亦タ

著シキ進歩ヲ現ハシタリトヲフベシ尚モ黙ラサレバ両国ノ関係ハ今尚ホ日本帝国王政維新ノ前ノ如ク下流ニ静止シテ更ニ一歩ヲ進マザルベキナリ思フニ両国ハ永ク古套ニ泥ンテ鎖港攘夷ヲ国是トナシ世間知ラズノ独立ヲ維持シテ外国ト交際ヲ結バザル国柄ナリシガ今ニ至テハ殆ント其体面ヲ一変シテ専ラ開明ノ進路ニ向ヒ交際ノ貴フベキヲ知リ文化ノ光輝ヲ以テ旧ノ国信ヲ破却シ善テ外交ヲ嫌悪シ死ヲ以テ之ヲ拒絶セント所言シタル国中ノ頑固

輩モ尽ク今日ノ開明ト交際トヲ謂歎スルニ至レリ

先年ニ起リタル両国ノ葛藤ニ就テハ我輩最モ細密ニ之ヲ吟味シタリ而シテ世人ガ一般ニ耳ヲ傾テ穿鑿スル所ハ夫ノ永ク外交ヲ拒絶シテ世間知ラズノ独立ヲ固守シタル朝鮮国ノ実情及ビ日本ト朝鮮トノ関係大ニ開ケ二百年来ノ鎖港論ヲ一変シテ新ニ交際ヲ結ハントスルノ実況等ニ在ルナリ思フニ此等ノ事ニ就テハ種々緊要ノ確説ナキニシモ非スト雖モ未タ事ラ

日本ト朝鮮トノ関係ヲ明説シタルモノアルヲ
聞カズ是レ我輩ガ此ノ篇ヲ稿スル所以ナリ
夫レ両国交際ノ精細ナル沿革ヲ陳述スルガ如
キハ固ヨリ外国人ノ企テ及ブベキ所ニ非ザル
ガ故ニ我輩ハ茲ニ最モ緊要ニシテ信憑スベキ
記録類ヨリ纂輯シテ其ノ概略ヲ示サントス敢ス
読者幸ニ之ヲ諒セヨ
我輩ハ主トシテ両国関係ノ概略ヲ示シ係セテ
朝鮮ノ国是ヲ説カントスルニ陳述ス
ル所ハ皇ニ日本ノ年代記ニ未タ刊行セザル記録

類及ニ政府ノ諮詢等ヨリ纂輯シ且ツ嘗テ朝鮮
ノ内地ヲ穿鑿シタル仏蘭西傳教師ノ紀行ヨリ
抜萃シタルモノナリ
而顧スレハ日本ト朝鮮ノ初メテ相ト交リタル
ハ実ニ紀元前三十三年即チ日本帝国第十代ノ
帝王崇神帝ノ時ニ在リ此ノ時アマナ国時ニ朝
鮮ハ分レテ数国トナルアマナハ其一ナリノ使
部ハ聘物ヲ齎ラシテ日本ニ来リ両国便益ノ為
メニ交際ヲ通セン事ヲ請求シタリ日本国ニ外
国使部ノ渡来シタルハ実ニ之レヲ最初トナス

孟し朝鮮ヨリ此ノ使節ヲ贈リタルハ崇神帝ノ
雄名ヲ聞テ頗ル其承襲ヲ慕フ迫ラレザル
ニ先ツ和ヲ修メタルモノナリ該帝ハ初テ將軍
ヲ日本ニ置設シタル天子ナリ而シテ当時ノ將
軍ハ近頃ノ如ク只一人ノミニ限ラズ得軍ノ名
号ヲ冒スモノ九ソ四人アリテ尽ク天子ノ親戚ナ
リキ

朝鮮国使ノ初メテ日本ニ来ルヤ先ツ謝前ノ敦
賀ニ着セリ此ノ使節ハ孟シアマナ王紀元五百
六十二年ニ羅国王ノ書ニ依呑セラレタル

五十リ)ノ子ニテソノ日本ニ駐在セシ一九ソ三
年十リ日本ノ古記ニ據シハ此ノ使節ハ即チ属
国ノ名代人ノ如キ待遇ヲ受ケタリト云フ
後ニ垂仁帝ノ朝ニ至リ羅ノ国使日本ニ渡来
シ種々ノ物品ヲ納レタリ朝鮮ノ交誼ヲ尽スト
此ノ如ク夫レ寫キニモ拘ハラス日本帝王第十
二代景行天皇ノ時即チ西暦第一世紀ニ當リ
本犬ニ兵ヲ率テ朝鮮諸国ヲ征シ遂ニ之ヲ属国
トナシタリト云ヘ尺此ノ一事ハ未タ全ク信ス
ルニ足ラス而シテ第三世紀ニ於テ神功皇后ガ

三韓ヲ征伐シタル世人ノ共ニ明知シテマタ
疑ハサル所ナリ此ノ皇后●ハ新●鮮国ノ全土ヲ
蹂躙シテ尽クニヲ征服シ朝鮮人ヲシテ永リ人
貢ノ禮ヲ怠ラサラシメタリ日本ト朝鮮ト交際
ハ斯ノ如クニシテ第十六●世紀マデ引キ続キタ
リシガ其時朝鮮人ハ貳心ヲ懷テ支那ニ服従ス
ルノ色ヲ現ハシタリ決是日本ノ将軍秀吉ハ大
軍ヲ朝鮮ニ繰リ出シテ其ノ貳心ヲ譴メ支那ノ
援兵アルニモ拘ハラズ忽チ朝鮮ヲ壓服シ唐ニ
定期ノ貢献ヲ怠ラザラシムルノミナラス数十
年間ハ実ニ廣大ノ土地ヲ占領シタリ秀吉ガ朝
鮮ヲ征シテ十分ノ勝利ヲ得タルハ日本及ヒ支
那ノ●歴史中ニ於テ快酷ノ最モ甚シキモノナリ
試ニ其ノ一班ヲ挙レハ世人ガ明知スル如リ秀
吉ガ凱還ノ後ニ建置シタル石碑ハ今尚ホ現ニ
京都ニ存セリ而シテ其石碑ノ下ニハ秀吉ノ軍ガ
殺戮シタル朝鮮人ノ耳九ソ六千ヲ埋メ[redacted]リ
トシフ当時ノ快壯実ニ想フベキナリ
降テ徳川氏ノ時代ニハ朝鮮ヨリ其朝ヲ誤ラズ
シテ貢物ヲ日本ニ納シ敢テ其礼ヲ怠セス其ノ

第十七世紀ノ初メニ於テ徳川家康ニ献シタル
珍品奇物ノ如キハ今尚ホ依然トシテ日光廟宇
ノ盧ニ存セリ斯リシテ朝鮮ヨリハ新ヘズ和睦
ノ使節ヲ日本ニ贈リ千八百六十八年即チ王政
維新ノ際ニ将軍ノ全ク廃止セラレシマデハ敢
テ毫使献貢ノ礼ヲ怠ラザリシニ似タリ然リト
雖モ朝鮮国ガ王政維新ノ前ニ其ノ使節貢物ヲ
日本ニ贈リタルハ実ニ其体裁ヲ失ヒ其ノ使節
ハ未タ嘗テ直ニ日本国ノ真正執権者(即チ帝王)
ニ面謁スルヿヲ得ズ日本ノ帝王ハ数百年以来未
タ嘗テ朝鮮ノ使節ガ日本ニ来ルヿ。時期ヲ知ラ
ザル程ナリキ然リ而シテ徳川氏ハ自家ノ権力
ヲ特ンテ王室ヲ軽蔑シ帝王賦祢ノ慶賀ノ如キ
ハ捨テ論セス只自家将軍ノ更迭ゴトニ新将軍
ノ就職ヲ賀スル為ニ特使ヲ日本ニ贈ルベキ旨
ヲ朝鮮国ニ命シタリ
徳川氏ノ殷鑑斯ノ如キナリシガ故ニ当時朝鮮
国使ノ日本ニ来ルヤ三ヲ江戸ニ引キ先中ヲシ
テ之ニ応接セシメ其通路ノ如キハ今ヲ距ル
百五十年前マデハ荷蘭陀ト同一ノ通筋ヲ通行

セシメタリシガ陸地ノ通行ハ何分ニモ費用多
ク到底日本ノ損耗ニ堪ヘンカ故ニ海岸ニ於テ
其使節ニ応対シ以テ旅費ヲ省カントヲ企テタ
リ朝鮮使節ノ一行ハ常ニ無慮三四人ヲ下ラズ
其後千八百三十七年徳川家慶将軍ノ襲ヲ継ク
ニ方リ初メテ朝鮮ノ来使ヲ對馬ニ限リタ
リ是ヨリ幕府ノ殖心ハマデ朝鮮ノ使節ハマタ
江戸ニ来ラザリシ所ニシテ日本政府ハ千八百
六十八年ニ於テ一大変革ヲ行ヒ帝王両セ政権
ヲ握リ都ヲ東京ニ定ムルニ方リ更ニ朝鮮ニ向
テ旧好ヲ尋ヌルヲ求メタリシガ朝鮮国ハ容易
ニ其要求ヲ許諾セサリシ此ノ時ニ方リテ日本
人ノ朝鮮領分ニ移住セシモノ数カラスト雖モ
一人モ朝鮮人ノ為ニ害セラレ●依然トシテ高
麗ニ従事シタリ孟シ朝鮮ハ断然両国ノ交際ヲ
拒絶スルヲ以テ固是トナスニハ非サレ共定朝
ノ使節ヲ日本ニ派遣スルノ一事ハ全クこれヲ謝
絶シタリトテフ
朝鮮国ガ此ノ一事ヲ謝絶シタルハ寔ニ種シノ
原因アルナリ孟シ支那ガ日本国ノ開明ニ進入

スルヲ見テ之ヲ忌ミスルヿ久シ是ニ以テ支那人ガ朝鮮ニ向テ日本ヲ誘誘スルヿ一ニシテ足ラス而シテ朝鮮人ハ常ニ支那人ノ言フ所ヲ信シテ疑ハズ是レ其ノ一原因ナルベシ且ツ朝鮮人ハ近来日本国ガ西洋各国ト日ニ交通ヲ篤クスルヲ見テ亜細亜洲ノ利益ヲ失フ所以ナリト思惟シ務メテ日本ヲシテ外交ヲ謝絶セシメント欲スルノ意ナキニ非ス蓋シ朝鮮ハ嘗テ千八百六十六年ニ於テ佛人ト戰テ之ヲ退ケ千八百七十一年ニ米人ト戰テ再ヒ勝ヲ得タリトシテ

其意既ニ驕レリ而シテ日本ハ徳川ノ末路ニ当テ既ニ朝鮮国ヲ抑制スル程ノ勢力ヲ有セサルニ今忽チ朝鮮人ガ強ンド三百年来未タ嘗テ聞知セサル日本帝王ノ要求ヲ受ケタリ其勢力ヒ愛ニ斯ノ如シ朝鮮国ハ蓋シ佛米ニ打勝タル故智ヲ襲テ日本ニ抵抗スルニ相違ナカルベシ其結局ノ如キ秋嘗別ニ之ヲ下篇ニ同陳セン

第二

朝鮮國ノ政府ト政旨

是迄數年間朝鮮王国ヲ管治スル權力ハ千八百六拾四年ニ始マリタル諸公務ヲ以テ各個人之掌ニ直接ニ連合セルモノナリキ、現今ヲ統御スル君主ノ先君「チユルチヨウング」ハ遺子ナクシテ右ノ年紀ニ殂落セリ、大凡其国君ヲ立ツルニ若シ先君ニ数多ノ遺子アレハ其内ニテ後嗣ヲ撰定シ其遺子ナキニ於テハ其王族中ヨリスルヲ以テ該国ノ通規トス、虽然如此ハ先君ノ殂落

不意ニ係ルヲ以テナリ（亜細亜洲内諸国王族ノ死去スルヤ之ヲ屢次ナリト云ハザルベカラザルカ如シ）而メ其撰定ノ方ニ力ケル亦通常希望トハ案外ニ出ルモノアリ、朝鮮國王タルニハ或種ノ弊圭ヲ要ス第一大國璽是ナリ此国璽ナルモノハ若シ後嗣ノ年齢成丁ニメ先王ニ直継スル代ハ其新王ニ交授シ又幼冲ナル代ハ諸后妃（只今殂落セル先王ノ後宮）中ノ一名ニ交付ス、是例タル千載不換ナリト認了スルニアラザレ代因襲ノ久シキヲヲシテ怜モ一般定律ノ如ク古傳ノ馴致セル所ナリキ、一千八百六十四年間王位ノ空缺セル管治ハ狂猛ナル一物トナリ而メ歴然タル縉紳家モ之ニ与ミスル者動シトセス以テ一時ハ談国ヲ乱世タラシムル迄ニ恐ルベキ姦謀ヲ起セリ、此争論ノ首倡者ニ就テ最著ノ徒ハ三后妃ナリキ、個ハ皆登時殂落セシ「チユルチヨング」王及ビ其先代ト先代三王ノ后妃ナリ、右ノ騒擾ハ国璽ヲ強テ奉ジテ大權ノ爭ノ可ラザル此表号（国璽ヲ去フ）ヲ擁シテ自ラ我コソ摂政国者ナリト公布シタル大后妃「チヨウ」ノ老臣ニ依テ遂ニ断決セ

ラレタリ。朝鮮ノ如キ地ニメ諸典型ト諸格法ノ甚タ行ハレタルニ似タレトモ其實烈(壞乱極マリナキ)ノ爭闘ハ此貪名ナル婦人ガ弱勢ニ支持セラルヽニ(アラ)ザレバ然モ容易ニ突然一朞以テ完成セラルヽモノト假定スル勿レ。談婦必然時勢ト其慣手ヲ有セシモ世人ガ亜細亜大洲内政府管治ヲ保安スル方法ヲ檢査セン二右ノ時勢ト慣手ヨリ起ル所ノ勢力ヲハ察知セサルナリ。輓近支那ニ於テ夫ノ両宮太皇后復タビ君権ヲ弄做セシヤ于時皇后ハ年尚若カリシ二其夫(皇帝)死シテ皮肉

末ダ冷メザルニ死ヲ允准(按スルニ賜死ノ義カ)セシカ如キ其例ナリ。后妃「チヤウ」ハ三十年間餘モ多サノ公務ニ參政熟知セリ。「イキ、チヨン」王ノ寡婦ニメ該王ノ治世ハ千八百三十年ニ終レリ又千八百三十四年ニ継統セシ「ヘン、チヨン」王ノ母ナリ。千八百三十四年ヨリ四十八年迄此后ノ聲價ハ平常間接ニ現出シタリト雖「チユル、チヨング」王ヲ冊立セシ年ニ至テ后ノ聲勢ハサシク衰ヘタリ而メ漸次ニ特権ヲ掌握スル「ヲ棄ラレタリ」チユル、チヨング」王ハ此后ノ近縁ニアラズ且王統

中ノ庶族ヨリ撰バレタルヲ以テ先代王ノ遺詔ヲ得ズ故ニ王ハ大概常ニ「チヨウ」后ノ擧動ト頗使ヲ或ハ抵抗シ或ハ之ヲ規避シ得タル所ニ拮据セリ然レモ該后ハ一モ此種ノ端厳ナル威力ヲ用エシ「ヲ」頭ハサヽリキ后ガ遂ニ卒然自ヒヲ國民中ノ操権者タラシムル精神ノ換ラザルト決定ノ本相ヲ現セシム「チエル、チヨンゲ」王ノ死後迄茲ニ述タル如キ奮力ヲ有セザルナリ后ハ国璽ヲ獲テ先ツ其大不利ノ對歆ナル自餘両后妃ヲ幽居セシメテ（此両后妃ノ中ニ就テ若キ

方ハオ識アル婦ナリキ）自ラ安宅ニ避ケ我口授ト料理ヲ以テ統治スル適當ナル王位者ヲ即ニ公ル二着眼セリ后ノ希望スル所ノ者ハ后ガ姪ノ一ナル「チヨウ、シユンゲ」ト云フ人ニシテ次下ニ述ルガ如キ手段ニテ近年ニ至リ尚名聲ヲ得タル程アリテ稍学問モアリ又觀望ヲ繫クニ足ル壯サ年ナリ然レモ其血統ノ穢妾ナリシヤヲ試一試スルニ王家ヲ継クベキ血潮ニハ餘程隔離セルモノナリ其實啻ニ選擇ニ苦エラルベキ貴族ニ齒スヘキ程ノ者ニモアラザルナリ后ハ諸顧

問ト恢議ノ後已レガ偏向セシ者ヲ棄テヽ更ニ
又年甫十二オニメ万機ヲ裁定セシムルニハ餘
リ幼冲ナル一嫡子ヲ立テンヽ決着セリ此嫡子
ハ王族「ニクング」公ノ子ナリ公モ亦談再出セシ
后ノ如ク獨身ノ安慰ト端莊ノ久シク確實ナ
ナリシニ付大権ノ根由ニ關シテハ淡然無私ナ
ル人ト久シク世ニ知ラレタリ是ヲ以テ太后「チ
ヨウ」ノ操権ハ堅固ニ礎定セシガ似シ太后ハ自
己ノ愛姪ヲ立テヽ王タラシムルニ付上等社會
ノ輿論ヲ敢テ軽藐セスト雖談姪ヲ我宮中ニ居
ラシメ自高ク巍々タル盛昌ヲ享クルノ栄ヲバ
分賦 倣セリ 儲又真主自ラ能ク管治ヲ執ル迄
ハ数年間ナラン而メ政柄ノ実地ニ干係ナキ父
ヨリ阻碍セラルヽナカリトヅ
如此ハ后妃「チヨウ」ノ夢ナリキ然リ此他數多東
洋繁華ト権力ノ幻想ノ如ク之ヲ持続スルハ餘リ
向出シ過キルナリ偖今王ノ父モ亦后ノ故智ニ
慣ハンヽヲ欲シ時機ノ至ル待撰ケタリシカ
驩テ国璽ヲ獲而メ後世人ガ亦タ疑得ザルノ名
利心ヲ以テ高嵩ニ冲騰スルノ羽翼ヲ開キ政府

ノ内幕ニ入テ忽チ要點ヲ得實力アル関白
ヘキ主政治ノ義ヲ総括シ已レニ反シテ徒黨ヲ毎ニタ
リト推測セラルヽ者ヲハ皆黜テ門葉ト家格ヲ
貶シタリ。此攻杵ノ神速且人意ノ表ニ出タル丈
ケ勝筭ヲ獲タリ。二、クエング氏ハ一旦該國ノ管
治ヲ得テヨリ千八百七十三年ノ秋迄通国ニ甚
シキ騷擾モナク之ヲ治得タリ。而メ其治国ノ要
トセル者ヲ省ルニ厭制至ラザルナク古未苛
剋ノ政治居多ナリシト虽未タ曾テ如此ノ厳酷
ニ及バザリキ。上下人民皆遂ニ之ヲ憎メリ虽然
氏モ亦奇策ヲ用エ已レヲ防禦スルニ周圍ニ近
衛厳備警戒アルヲ以テ怨恩家ノ諸隠謀ヲメ施
スニ由ナカラシメタリ。且又外交ノ事情タルヤ
氏カ親ラ占握セル勢力ヲ以テ軍畧勇大ノ長所
ニ加味シテ之ヲ處方セリ。曩ニ佛蘭西亜墨利加
ノ該国ニ至ルヤ氏ガ統治ノ時ナリ此等ノ事跡
ニ付國民ハ其首尾能キ完成ヲ以テ氏ガ攘夷セ
リト思ハルヽガ為ニ氏ヲメ更ニ尊栄ヲ享ルノ一
機會タラシメタリ。右拒絶ノ事タル其変ニ應シ
然モ善ク講了セラルヽヲ以テ民心ヲ維持ス

ルノ偉績トナレリ上曾テ怨悪ヲ受ケシモ之ガ
為ニ却テ栄譽ト勢力ヲ加エタリ。日本ヨリ再修
交通ノ事ヲ屢々提合タリシニ又同一ノ精神ヲ
貫ヌキ其過激ニ渉ラザルモ之ヲ拒絶シ得タリ。
氏ノ政治タル古来ノ国俗ヲ少シモ完全ニ保存
セント欲セシニハ有ラザルカ如シ。内ハ以テ残
虐、厭制、苛刻至ラザル所ナシ。外ハ以テ支那ヲ除
クノ外相連毗スルニ足ラスト認了セリ且支那
ト虽其交際ヲ視察スルニ相互ニ嫉妬嫌疑以テ
各自ヲ警備シ唯表向ニハ端莊ナル礼式ヲ虚飾

スルモ其實決テ友誼親愛アルヿナシ。
朝鮮人民ガ外国ニ係ハル氣風ヲ茲ニ詳明セン
ニ其最モ親愛スベキ国（支那ヲ云フ）ト虽之レト結和
ヲ保持スルノ方法タル尤ノ如クナルヲ短簡ニ
述ブルヲ以テ有用ノ文字トス。成丈ケ孤立獨歩
シテ自国ヲ守ランガ為ニ平生其国境ノ周圍ニ廣
漠ナル一帯地ヲ置テ永年荒野タラシムルヲ以
テ朝鮮国ノ定法トス然リ其實此空地ノ性質甚
豊饒ナリト虽近年迄ハ支那ト一致合議シテ之
ヲ存守セリ。支那人或ハ該両属地ノ一小部ヲ耕

転シテ危難ヲ釀スエノ者アレ氏大概此地内ニ
敢テ住居スルヿナシ只竊ニ産スル所ノ方物
ヲ收納スルニ過キス又朝鮮国境ヨリ四五十英
里ヲ距テ禁制セル一空地アリ茲ニ支那或ハ満
州ノ為一小邑ヲ置テリ此邑ヲ境門ト唱ス如何
トナレバ両国人民ノ交通ヲ許可スルニ只此筋
ノ孔竅ヲ存セルノ故ナリ此所ニ両国ヨリ汎出
セル税関有司ノ寄寓スベキ一小屋ヲ其中央ニ
置キ以テ標記トセリ一側ヲ朝鮮人ノ第宅トシ
又一側ヲ支那人ノ第宅トス其中心ノ一屋ヲ以
テ實ニ組庸ヲ徴收スルノ公廨ニ当ツ蓋シ境門
ト云フ語ハ恐ラクハ文字面ヨリ尚意味深カル
ベシ但シ其實ハ二筋ノ門路アリテ互ニ東西ヨ
リ汎出セル委員ノ支配スル各房ノ内部ニ於テ
一路ツヽ使用セリ此門路ハ毎年四回開クヿヲ
例規トス即チ第一回ハ太陰暦ノ三月ニ披キ大
約七十日間ハ商賣ノ為閉チズ次ニ八月ニ披キ
三週間ハ之ヲ閉チズ次ニ九月ニ披キ六週間ハ
之ヲ閉ヂズ又次ニ十二月ニ之ヲ披キ廿五日間
ハ之ヲ閉ヂザルナリ就中第一第三ノ関披ヲ以

テ要用ノ期間トシテ時其擔任ノ事務ヲ弁理ス
ルカ為ニ朝鮮ノ有司ヨリ四百両（大約五百三十二圓）ノ礼
金ヲ受クル所ノ「フオング、ワング、チユン」（是レ最モ満州
ニ接近セル一市邑ナリ）府ノ知事（贈ルヲ例トス又該知事ハ）ニ謁シ境門ノ鎖ヲ緘閉セザ
ルヲ例トス等二等四ノ関吏ハ格別要期トセズ
其理務ハ一名ノ下役ニテ立ヲ扱ヘリ個モ亦ニ
百両ノ謝金ヲ受クルナリ是ヲ以テ觀ルキハ朝
鮮人ハ政府ヨリ期斯ク狹窄ニ制限セラルヽト虽
此定期ノ貿易機會ヲ格外ノ恩典ト認居ル丁明
瞭ナリ偖此定期中ニ獨リ交易ヲ許サルベキ品
物ハ其種類甚タ僅少ナリ且其高モ從テ多數ナ
ラザルナリ即チ朝鮮ヨリハ生皮、毛皮、人參、金等
ナリ又支那滿洲ヨリハ其地方ニ天然産スル單
一ノ方物耳ナリ朝鮮人ハ西洋綿布ヲ甚賞美ス
ト虽政府ハ歐洲製造品ヲ厳禁シテ之ヲ許可セ
ス故ニ其輸入シ得ル物ハ實ニ小高ニ過キズ又
両国政府ノ有司互ニ交通スルモ同様ナル戒慎
ト検束ヲ以テ行ハルヽナリ九朝即チ第三次ノ
関門ニ當ツテ毎年例規ノ大使節談門ヲ過キテ
北京（支那国ノ）ニ到レリ又毎歳自餘ノ候伺拜趨アリ

ト虽ドモ慣例ノ式ヲ行フ而已ニメ事務ノ要用ニ
アラザルナリ斯ク迄嚴切ナル屏絶ナリ故ヲ以
テ該国民ハ若シ之ヲ軽忽ニセバ其礼欵ヲ奉ス
ル所ノ鄰邦ニ不信ヲ抱キ已レヲ侵伐シ自餘遼
遠ノ外国ニ感觸セル者ノ如ク思想セリ数百年
来此屏絶ノ組織ハ實ニ変換セサリキ但シ常ニ
支那人カ自ラ怠慢シテ之レガ傾倒ヲ輓近引起
セシ事跡ヲ執テ論ス可ラズ滿洲切兵隊ノ常ニ
搶奪ヲ行フ久シカリシカバ夫ノ支那有名ナ
ル將軍ニメ「チヒリ」ノ奉行ナル「クヽホユング、チヤ
ング」氏ヲメニ年間以前殆ント之レヲ彈壓スル
ニ未曾有畫策ヲ運ラサント決心セラレタル程
憤怒セシ「タリ」偖朝鮮国境ニ兵卒ヲ進発シ且
該国ノ北界タル「ヤル」河ヨリ應援センガ為一炮
艦ヲ送レリ船舶ノ斯ク此半島形国ノ版圖内ニ
進入シテ号令スルニ足ルヲ實驗証明セラレ
タリキ両国ニ分属セル一帯ノ堺地ニ付キ始メ
テ止ムヲ得ザルノ疑團ヲ生シ而メ毫モ猶豫ス
ルヿナクヒレヲ占領スル準備ヲ做セリ既ニ大
概支那ノ測量家ニ依テ偏歴推歩セラレ其地ヲ

多ク掠奪サレタリトゾ
此前章ニ述ブル所ノ事ハ閑白ニ、クユング氏ノ
摂政中ニハ起ラザリキ、此暴戻ナル桓武家ノ経歴
ヲ再説センニ其政治ノ擾累煩雑ナリシ長路ハ
其末年ナル千八百三十七年ニ於テ終レリ。又其
壓制ニ制致ス慫慂セシ事情ニ付テ紛々タル諸説アリ
虽然次下ニ引用スル所ハ最モ實説ナルガ如シ
然リ此国景況ヲ相隔離セル者ニハ却テ荒誕
怪異ナリト謗譏セ。シムル所ノ奇怪ナル様子モ
若シ者官ニ一種ノ那或人民ガ支那人主張スル品行ノ

ノ体面ニ慣習シタル風俗如何ヲ知悉スルニ於
テハ又奇怪ノ觀ト做サヽルベシ。老太后「チヨウ」
ハ十二年間前ニ其勢力ヲ領奪セラレシヿヲ曾
テ忘却セス又其凌駕ヲ涵容セスシテ常ニ復讐
セント残忍ノ念ヲ含ヘタリ太后ノ宮中諸々不
平黨ト悲憤ヲ抱ク者ノ集會所ト為レリ。最モ鞠
躬シテ此陰謀ヲ永ク企テヽ其端倪ヲ窺フニ由
ナカラシメタル黨徒ノ巨魁ハ太后ノ姪「チヨウ、
シユング」氏ニメ其成オザルモ千八百六十四年
王位纒流ニ付テ太后ガ第一ニ選擇セシ人ナリ

トヅ、氏ハ登時年齢約三十歳活潑ニメ勇気勃々タル丁其体貌ニ現セリ、虽然其努力シタル秘密ノ事件遂ニ露顕セシハ于時氏ガ容易ナラザル隠謀ヲ將ニ施行スルニ殆ント垂々タルノ期ナリキ政府ヨリハ氏ヲ捕拿スルノ令ヲ発セリ、氏ハ伯母ニ救護ヲ乞ハンカ為ニ出奔セリサレド太后ノ武備ハ若シ氏ガ太后ノ下ニ達ニ到達シ得ハ底防スルニ足レリ、太后ノ謀畧ニ富ムヤ今又一ノ計策ヲ企テタリ、太后燕居セリト虽老成奇拔ナルヲ以テ關白「二、クユング」ヲメ已レヲ蔑視スルニ由ナカラシム是レ衆ニ超過スル所ナリ、太后我食堂ニ朝餐ヲ設ケテ賓客ヲ招待セリ列席ノ巨擘ハ太后、其姪、并ニ怨恨深キ「二、クユング」氏ナリ、茲ニ諸列位皆坐ニ即ケリ于時太后曰ク此器皿ニ盛レル物ノ中ニ毒ヲ以テ成ルモノ多シト、又曰ク其一門ノ争競ヲ痛恨シ其一國ニ波及セル影響ヲ酸悲シテ曰ク和睦親密ニ於テ若シ關白ガ道理ニ根由スルノ効條ヲ認アスルニアラサレハ国家大災危ヲ極フニハ只各位諸共ニ自殺スルノ外他法ナカルベシ、夫レ如此愁歎

ニ臨ミ已レヲ犧牲タラシムルノ問題ヲ解避ス
ルヿハ朝鮮人ノ高尚ナル氣象ト威容ニ似合ハ
シカラス且又二中擇一ノ止ムナキ際ニ況ヤ盛位ニ在ル
者ハ殊ニ死ヲサンスヘキカ為ニ「ニ、クユング」民
ハ太后ノ要求ニ悉皆一致同心セリ。是ニ因テ暫停爭競ノ
弥絶サレシモ之レカ忍耐スルノ本質ナキヲ以
テ頃刻ノ整齊ニ破ラレタリ。是ニ於テカ新詭計
ハ動揺ヲ発露シ而シテ一大困難ヲ経由シテ貴族
ト人民ノ愁歎ヲ表セル哀訴狀ハ于時年齢僅ニ
廿一年ナル王ノ直披スル所トナレリ。該奇事成

功ハ甚タ危フキ労役ナリキ蓋シ使仆者ノ上申
スル言語ヲ省破セラルヽカ又ハ王若シ之レガ
擧動ヲ預テ感格スルニ於テ忽チ死罪ニ處セラ
ルベキヲ以テナリ。サレ𪜈王ハ「ゼ、ハロウン、アル、
ラシッド」（古昔アラビヤ国ノ地名故事未詳）性情ノ君主ノ似タ
容子ニシテ一辞ノ発言モナカリシ但シ其稟呈セ
シ哀訴狀ニ含畜セル實情如何ヲ親シク発見セ
ンガ為ニ假份偽相シテ吟味ノ次第ヲ目前ニ訪
察考究セリ。王ハ訴狀ノ指示セル公然タル政界
ノ改革ニ加フルニ我父ノ身ニ大辟ノ詞訟ヲ含

ムヲ以テ妄ニ之レヲ信用偏聽ス可ラズト思惟セリ。然リト雖王ノ探訪スル告狀ハ忽チ王ヲメ全面告罪者ニ差遣ナキヲ滿足セシメタリサレ氏王ハ尚之レヲ決行セザリキ。假令夫ノ諳弱昏愚ナル直先代氏諸王ニ比類スベキニアラザレ氏王モ仍未タ「ブルタス」(羅馬人)ノ所作ヲ感格シ我實父ノ身上ニ刑辟ヲ處斷スヘキ程十分ノ用意ナカリケリ。太后「チヨウ」ハ遂ニ計竊シタリト決定シ。自ラ身ヲ墻壁ノ内ニ閉籠メ餓死スル丁ヲ外人ニ示セリ。太后ハ夫ノ禁食ニ於テ

引起シ得ヘキヤ/ルト其否ヲ問ヒス皆諳筭ヨリ出ツルモノナリ恐ラクハ其欲スル所ノ物ヲハ始終用給セシ丁ト思ハル、サレ氏其風説ハ或時王ノ偶然宮外ニ徘徊セラレシキ王耳ニ聞達セル迄廣布傳聞セラレタリ此ニ於テカ王ハ之レヲ聽テ太后ノ許ニ訪叩シ其壽齡ト前ノ尊位ニ應スルノ礼欵恭敬ヲ尽シテ太后ノ意衷ヲ査問セリ。是レ太后カ久シク希望セル一機會ナリキ。仍テ其困苦配慮ノ次第ヲ悉ク吐露セリ而メ太后ノ様子ハ假令其歔ノ子ニ對詰スルニセヨ昔日ノ讐歔ヲ寛

恕セントスルカ如キハ更ニ思ハレザリキ。此對
話ノ為ニ王ハ爾後必ス政令ヲ親裁セリ。僅々数
日ヲ経過スル内ニ王ハ實際此宣示ヲ善良ナラ
シメタリ。以テ父ノ本務ヲ解釋シ先ツ暫時ハ王
宮境内ニ安堵シテ止宿センヿヲ父ニ請求セリ。
然リ諸般皆王ノ欲スル如ク爲サレタリ王ハ我
身ヲ獻黨ノ武器内ニ抛投セリ其事跡或ハ不注
意或ハ妄當ナル儆戒ヲ守リ又或ハ賢ニ愚ニ動
止セリト虽現ニ仍之レヲ徵スルニ足ル。王ハ諫
ヲ容レテ突然君側昵近ノ大臣（即チ日本政府内閣ノ如ク三大臣）

ヲ以テ成レリ）退黜シ之レニ更迭スルニ当時有名ナル
「チヨウ、シユング」氏ノ朋友及ビ其黨派ノミヲ以
テ任セリ。虽然該盛位勲列ニ於ケル勢力ト権柄
ヲ誠ニ恭喜セシ徒モ今ハ既ニ棄サレタリ。王ハ
縱令其京城ヨリ少シク距リタル地ニ現ニ幽閉
蟄居スル實父ナル闢白ヲ棄絶シテ顧ミスト虽
心力ヲ費用シテ愛情ノ之レガ為眷々タラザル
ヲ得ザルカ如シ。王ノ該国ヲ統治スルヤ「チヨウ、
シユング」氏ハ王権ニ甘服從屬セリ。而ノ現今発
露セラレタル如ク王ハ日本葛藤ノ生スル前迄

ハ其王威ヲ振フテ統御セリ又該日本葛藤ノ起
原顛末ハ必ス次章譚話スベシ